

——水位が下がりますと、井戸が涸れるだけではないんです。樹木がだんだん枯れていくおそれがとても強い。樹木というのは、地表から根を張っているところはせいぜい二メートルくらいです。横に張って木を支えているわけです。このあたりにはサクラとかマツとかツゲとかいろいろあわせて二百種くらいありますが、枯れてくるおそれがある。水に縁のあるクラマゴケのような苔類もある。五十年もかかってようやくできた自然のバランスが狂ってしまうことになりす。強い雑木だけが残って趣きのある樹木が枯れてしまっはしようがありません。木を枯らしてしまったというところで聞いてみても、原因を突きつめていくと地下水の問題に行きつくところが多いとわかってきました。いろいろ勉強会を開いて、地下水は一度破壊されたらもう回復はできないということがわかり、それが地上の樹木にも大変影響してくるということがわかってきましたので、共通の問題として水を大事にしようということになったわけです。日照とかは話し合いで譲りあってまとめる。また地下水が枯渇するおそれのある地下室は掘らないということにしていたら、高さも地下に配慮していただいた建物ができたわけです。ところがよくよく考えてみると、将来寺町のあちこちでそういうことが起こる可能性があります。この経験を生かして皆さんで環境を守っていくということ、

「烏山寺町の環境を守る会」というも

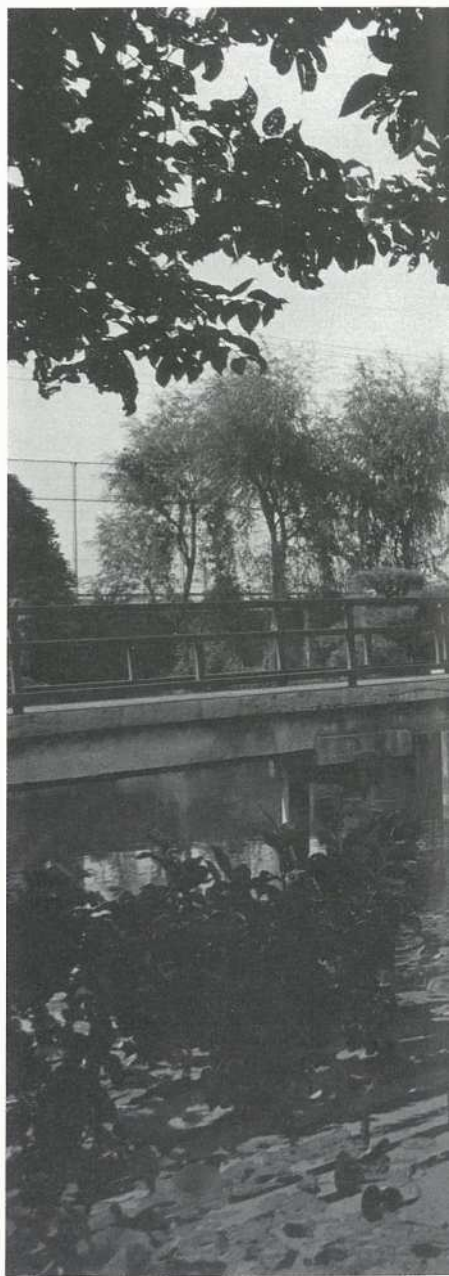
のを組織したわけです。そして、水と緑と寺町の街並みを二本の柱にした環境協定ができた。うるさいとかわずらわしいとかいえばそれまでで仕方がありませんが、やっぱりこの協定をなんとか守ったおかげで寺町の環境が保たれているんだと思います。今では寺町で建物を作るときには、協定に沿ってやっていくということ、皆さんにご理解いただいています。

——世の中どんどん変化して新しくなっっていいものと、変わらないで人に懐かしい思いをさせるものと二つないといけないような気がします。私もそうですけど、自分が過ごした田舎へ行きますと、二十年前四十年前の昔の樹木とか建物がありますととても懐かしいですね。ふるさとへ帰ったって気分になります。ところが、住んでいる人や建物・自然なんかが変わりますと、自分の親類へ行っているながら浦島太郎のような気分でもうふるさとじゃあないなあって。五十、六十になるとそういう気分がするものです。ところが、お寺なんかに行くと古いものがあったり木があったり、昔の小学校の校庭の真中に一本の大きなエノキがあったりケヤキがあったりすると、ものすごく心のやすらぎを覚える気がします。

世の中には変わっていいもの、近代的になっていいものと、変わってもらいたくないものがあるんです。そういう中で、お寺の建物とか自然とかはなるべく変わってほしくないものになるんじゃないでしょうか。世田谷には戦争中たくさん兵隊さんが駐屯してまして、昭和十九年ころには兵隊が足りなくなってきたのであっちこちからたくさん召集したようです。三宿のあたりは兵隊屋敷なんて呼ばれていました。今の昭和女子大のあたりも兵舎だったんですよ。その部隊に召集されても宿泊場所が足りず、戦地に行くまで十四日とか十五日とか船の出る間烏山のお寺に泊っていることもありました。今でもその人たちが時折便りをくれたり、なかには訪ねて来る人もいま

す。ほんとうは一度宮門をくぐってしまってもう家族には会えないんですけど、ここのお寺に来ていて電話するとかして連絡すると、家族の人が飛んで来るわけです。内緒でよく兵隊さんに家族の人を会わせてあげました。おむすびを持ちたりぼたもちを持ちたりして、会いに来ましたね。そういう人たちが四十年たつて、あのおときはお世話になりましたなんていらっしやるんです。そうしますと、建物に入っってこれは懐かしいとか、木を見ますと、いやーあのときはこうだったとか、四十年前の記憶がいっぺんに戻ってきてしまっうんですね。現在の幸せを自分でつかんで確かめていらっしやるのがほんとうによくわかります。それが全く変わっっちゃいますと、心の中にとどめてお

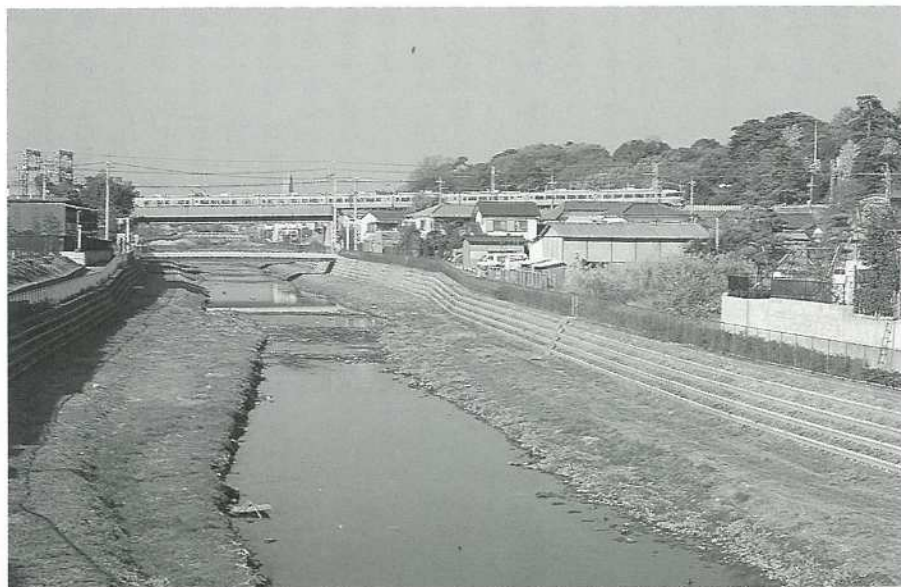
いたものがなにもなくなっちゃう、とても淋しいことですよ。そういう意味ではすべて古いものがよいというわけではないんですが、やっぱり残っていることが、人間でおかしなもので心のやすらぎになっているんですね。——もう今は都内でも、東京ばかりでなくほかの都市でも、お寺の屋根は高いビルに囲まれ窪んだところにあるます。昔はお寺の屋根っっていうのはわりあい高くて目についたんですが、木もほとんど植わっっていない。鉄筋も増えています。寺っって柱に書いてあるから寺とわかるというんではとても淋しいことです。だから、辛い情緒や雰囲気が残っているこの寺町をなんとかしてみんなで見守っっていくと思っっています。



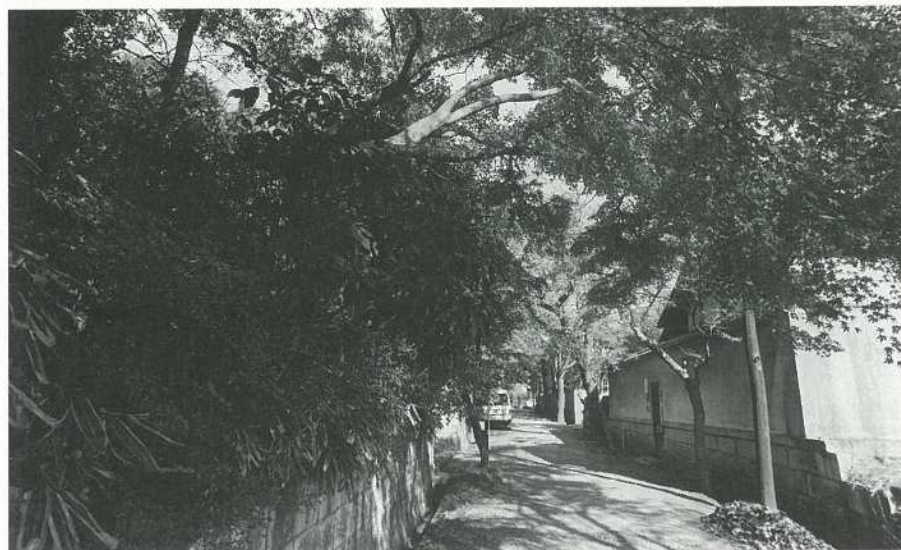
スイレンやコウホネの花が美しい鴨池③

烏山寺町

世の中、変わっっていいものといけなないものがある。お寺なんか、変わっってほしくないものだと思います。



野川をわたるロマンスカー⑤⑤



桜ともみじがつくる緑濃い小道⑤⑥



生け垣がつづく⑤⑦

ここは開放 囲いなんか

僕は戦争中、お腹が空いたときサクランボをとろうとよじ登ったりしたもんですよ。

富美子 そのあと白アリか何かでダメになって、あのころからみれば、今はいくらかも残っていませんよね。

為 正 今有名なイチヨウ並木は、成城学園の生徒さんが、勤労奉仕を課せられて、小さい苗木を植えたんですよ。ほんとうに小さい木でしたね。学園の帰りに友達に僕の帽子をひっかけて、それをよじ登ってとったのですが、そういうふざけっこにちようどいいくらいの。今は大きくなりましたが。

富美子 並木も変わりましたけれど、住んでいる方々もずいぶん変わったわね。

為 正 そう、みんな出ていっちゃった。元米、分譲地は十八間と二十間の三六〇坪くらいが単位だったのだけれど、相続税にたまりかねて一部を売ったりするうちにだんだんとね。なかには一族で保っているところもあるね。誰々村なんていっています。一族で細分化して小さな村ができるわけです。

富美子 戦前は、野原だったのよ。

為 正 うん、炭焼きのまねごととしてね。父が『炭焼日記』を書いたりした。

富美子 私がこころ来たのは昭和十六年でしたけれど、当時、高圧線の大きな鉄塔が目立ってたわね。よく雷が落ちたのよ。いまじゃ信じられないくらい。

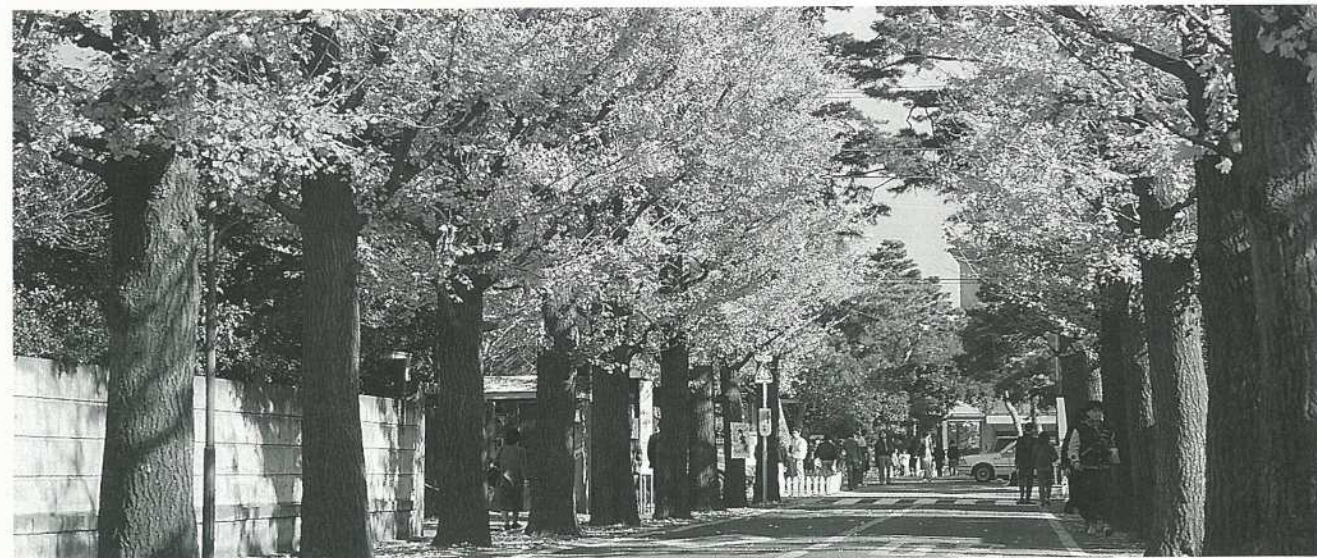
為 正 それより何より違うのは、昔はみんな駅までの距離なんか気にしなかったね。歩くのが平気だった。それが最近では駅から何分、すごく気にするね。駅前のカド地なんが一等地になっているし。

富美子 昔は街も小さかったでしょう。南北

成城のまち

「成城」といえば、生け垣のまちで知られています。いったい誰が生け垣を提唱したのか、どうしてこんなに美しい緑なす街並みができ上がったのか……。

このまちに昔から暮らしている柳田為正さん、富美子さんご夫妻にうかがってみました。



成城学園前のイチヨウ並木。成城のシンボルになっている⑤⑧

された自由な土地という感じがあって、 にこだわらなかつたんだらうね。

為 正 私の父の柳田国男が生け垣のまちにしようじゃないかと提唱したと伝えられていますが、あれはウソ、伝説ですよ。父はこのあたりでいちばん横着で、他所さまは立派な生け垣をつくっていましたが、うちは四つ目垣。竹をくくっただけの簡単なものにバラをからめたものでしたよ。ただ、皆さん、このあたりの方は塀はつきりませんでしたね。

富美子 というより、昔、ここに越してらした方々はだいたい東京にお家があって、こちらには別荘みたいな感じだったのね。東京のお家は立派な塀を構えたお屋敷なんですけれど、ここは開放感があったのね。

為 正 そう、ちょっと開放された自由な土地という感じがあって、囲いなんかこだわらなかつたんだらうね。生け垣にしても野原との境界みたいなものだった。

富美子 高級住宅地なんて感じじゃなかったのね。

為 正 だいたい成城のまちというのは、成城学園が土地を持っていてそれを学校関係者や父兄に分譲したんです。その利益は道路づくりにあててね。そのとき、大通りを北にいく通りを桜並木にしまして、ただ、派手なソメイヨシノは避けて山桜、大島桜にした。これは学園の先生が主張したみたいですね。



柳田為正さん、富美子さんご夫妻

あわせて一〇〇ブロック、六〇〇戸くらいしかお家がなかったのよね。

為 正 小田急線が通る前は、北に京王線、南に玉電が走っていたくらいだったしね。小田急開設時に成城学園前駅ができて、地名も成城と呼ばれるようになってね。成城学園がここへ来る前は「大字喜多見字東之原」が正式地名で、雑木林ばかりの、まあ、たいした土地じゃなかったね。

富美子 昔はみんな井戸だったでしょう。
為 正 そうそう、この土地は水の出が悪くて、井戸も相当深く掘らないと駄目だったね。この辺の地下水は、三ッ池の下の神明様のあたりでやっと湧き水になるくらいだから。

富美子 井戸からポンプで水を汲み上げて、水道みたいにして使っていましたよね。よく家へ来る植木屋さんが言っていましたよ。「昔は父がほうぼうで集めたこやしを荷車で喜多見の自分の家へまで運んでいて、その荷車の後押しをよくしたものだ」って。

為 正 そういう光景がびったり当てはまるのどかで美しいところだったね。

富美子 ビルが建ち始めたのは今から二十年前くらい前でしょう。オリンピックの前後のプラザ成城とか。ほんとはこのあたりは当時、第一種住居専用地区で、高いビルは禁止されていたのですけれど、そういう建築規則をあまりやかましく守れて言わない時代だったのね。それでずいぶんビルが建ったのよ。

為 正 反対するヒマもなくアッという間だったね。そのあと、私たちの側も都市計画法がわかるようになってきて、街づくりもみんな考えてるようになった。

富美子 玉川学園を創立された小原先生が中心になってね。

富美子 それで思い出しましたがけれど、成城というまちがこんなに広がったのは、戦後、高級住宅地のイメージが定着して地価がどんどん上がってからです。まあ、南は世田谷通りに突き当たってしまいますからそれ以上は発展の余地はございませんが、北のほうはほとんど地名が成城になっていって、成城という和高く売れるからなんですって。(笑い)
為 正 そうだね、昔の成城といたら、今の大岡昇平さんのお宅くらいまでだったね。ところで、せたがや百景に因んでこの辺の景色のいいところをあげると、成城の西の崖、あそこをハゲというのですが、国分寺崖線、国分寺から多摩川にかけての落差二十メートルくらいの段丘ですね。そこまでいくといい眺めですよ。昔は父と一緒にほうぼう歩きました。

富美子 今でも喜多見のほうからこちらを見ると、あの辺のガケ、いい感じですねえ。
為 正 だから、そういう景色が開放されて

いないのが実に残念ですね。
富美子 それと家の近くに桜並木がありますでしょう。あれは賛否両論ありますけれど、私はお花は美しいし、樹木があるのとないのとでは夏の温度もだいぶ違うのね。それに、落ち葉を掃く喜びというのも貴重ですし。

為 正 この家もずいぶん木が多いね。実利的に見ると無駄な土地をと思うだろうけれど、木を生かしておくというのは成城の空気のためにも大切だし、ほんとうに生活が大変になってそのために木を切らなくてはならない場合は仕方ないけれど、できるだけ緑というものは残しておきたいですね。

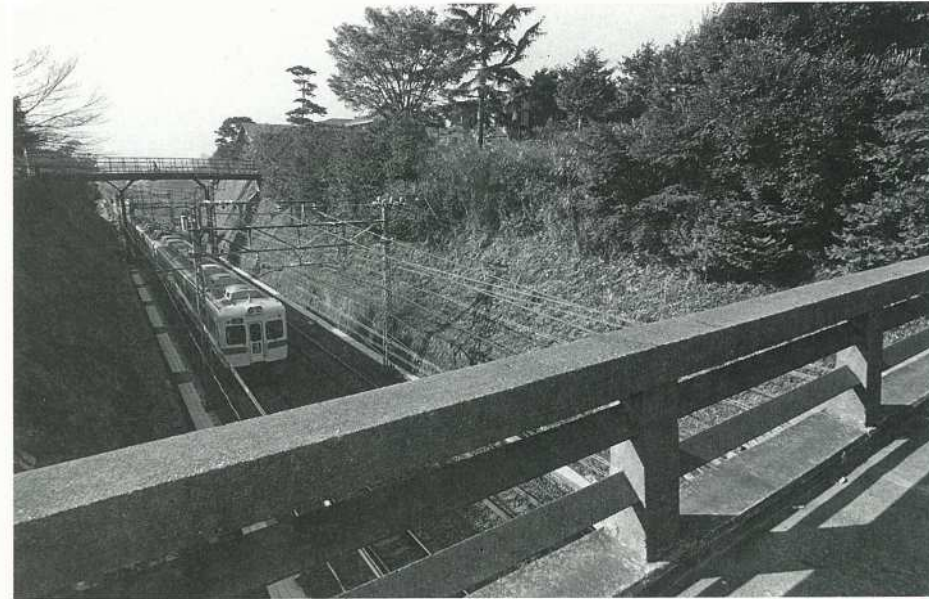
成城の西の崖のあたりの眺めはいいですね。



桜の花のトンネルができる



成城学園キャンパスの池



切り通しを小田急が通る



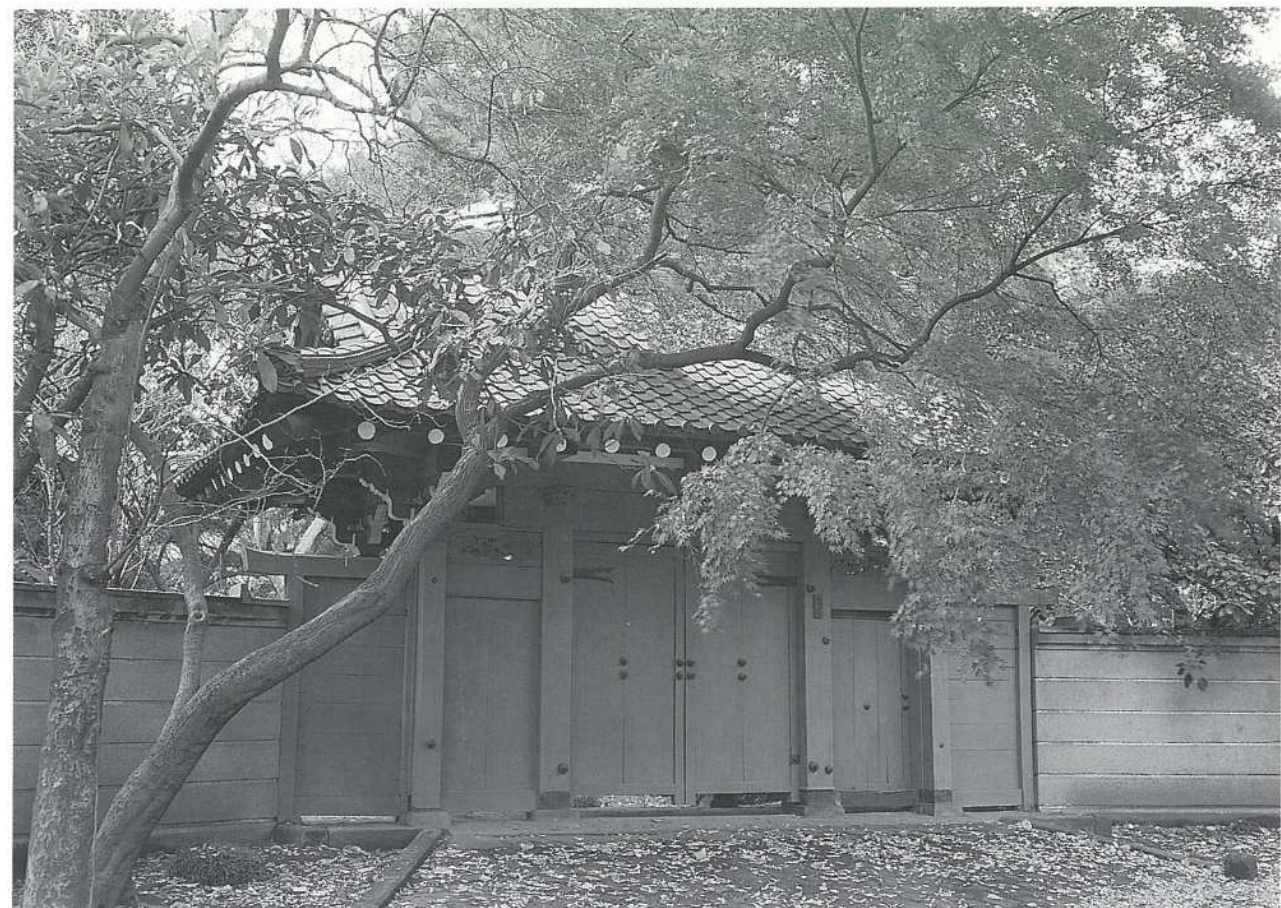
代沢のまち 阿川家の門

表面に塗ると木をグッと引き締めて雨風に対して非常に丈夫になるといふことで、ひび割れなんかも引き締まってしまおうです。門の前にある柿の木は波柿で、塗り替えに備えて植えてあると聞いています。

門の扉には乳のかたちをした紙が打ってありますが、数が少なくなっているのは、戦争中銅の献納ということでの間にははずされてしまったんです。

地震に振られてこの建物も東に傾いたんで、できるだけ昔の木組を残して直しました。一階部分が享保四年で、二階部分が享保六年だということがそのときわかりました。この座敷も畳をはずすと、下は板敷になっています。この家には將軍さまが度々寄られたそうで、將軍さまがお越しになると、畳をあげて床の間に積みその上に円座を敷いてお休みになったという話を聞いています。もう今は取り壊してありませんが、將軍さまの使われたという湯殿や厠もありました。將軍さまの使われた手あぶりの火鉢もまだあると思います。きっと物置きにしまっているんでしょう。二階建てでというの昔は珍しかったんでしょうけど、おそらく將軍さまが寄りになったからでしょうね。

江戸時代、阿川家は代々寄場名主という役を果たしていたそうです。これは警察権を持った名主だったんですよ。ですから捕物道具一切があつて、細長い提灯や刺股、袖搦、六尺棒、十



幾星霜を経た阿川家の門、門前の紅葉に朱色が映える⑧

享保六年と記されてありましたから、二百五十年は越えています。

朱色の門になったのは大震災のあとだと思えます。飛火を防ぐ屋根にするため、茅葺きを瓦かスレート葺きにするようにということで、屋根を取り替えました。もとは門も建物も屋根は茅葺きで、大変に風格がありました。この建物も正面から見ると、金閣や銀閣のようでしたよ。門の屋根の内側を調べてみると、棟札に享保六年と記されていたので、二百五十年は越えていることになります。修繕は私が学生の時分のことでしたが、門の両側の塀まわりは朱色に塗ってあったように記憶しています。江戸時代は朱塗りの門はご禁制だったそうです。子ども時分の記憶では、ケヤキ材の門は雨風に相当さらされてザラザラした感じになっていました。修繕のとき門に塗ったのは、ベニガラと光明丹を柿の渋でといたものだそうです。それで朱色の門になったわけですね。これは木の



阿川昌朝さん



落ち着いた雰囲気を持つ代沢の住宅街⑧



この座敷で將軍が休んだという⑨

二月三日、年越しの日につけるというヒイラギと鰯の頭が玄関脇に飾ってある。大きな木に囲まれた古い旧家の静かなたたずまいである。

阿川昌朝氏には、ちよん監をのせれば江戸のご先祖の名主さまを彷彿とさせるような秀麗がある。

田圃の穂波の先、 東南の方向には富士山も見えました。

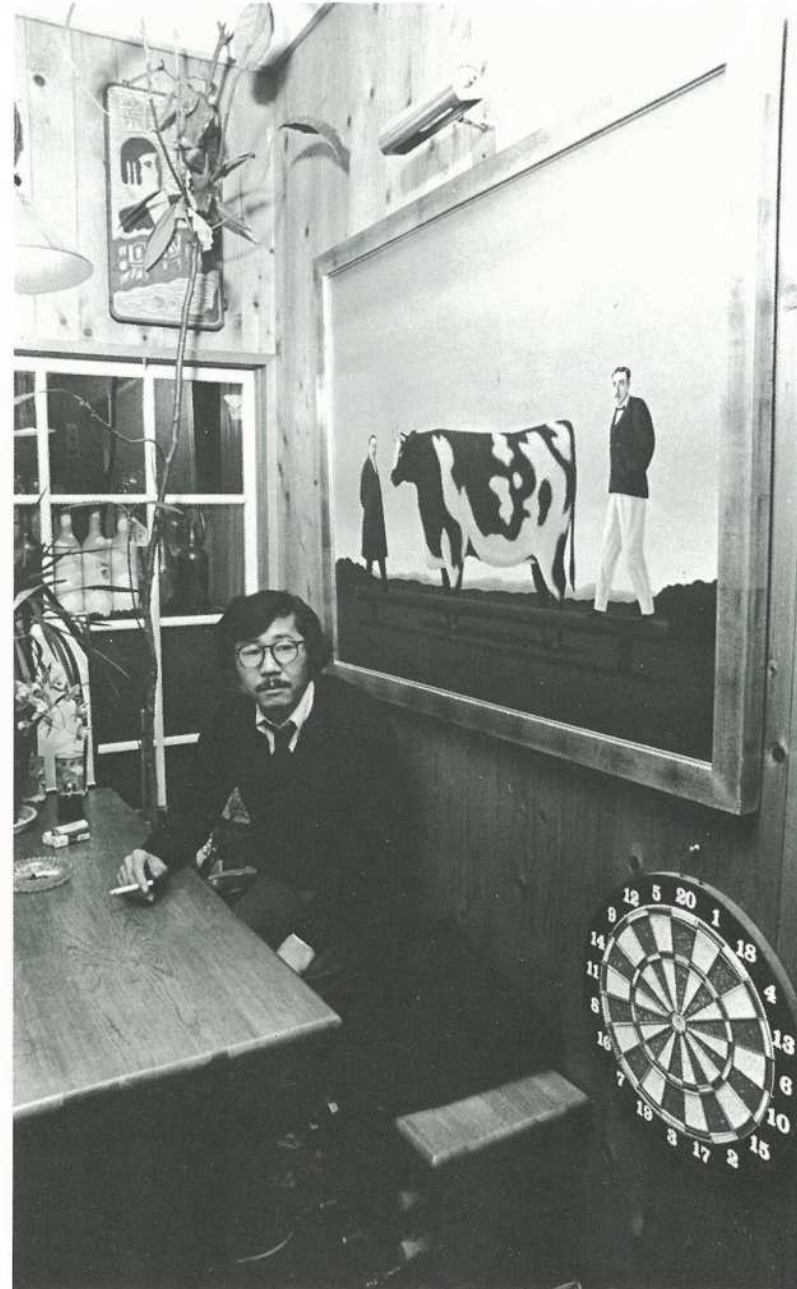
手なんかが残っていたのを覚えていま
す。昔は前の庭が白洲になっていて、
裏には半もあつたそうです。受け持つ
村の範囲も広がったようです。前にあ
る北沢八幡さまは七沢八社随一とい
いますが、ちょうどこの範囲だったので
はないでしょうか。

——大震災の前までは、ちょうど家の
前が池と田圃になっていて、その先の
ほうには北沢用水が流れていました。
田圃の穂波の先、東南の方向に富士山
も見えて、とても景色のよいところで
したよ。震災後は都心からこちらのほ
うに住居を求める方が多かつたもんで
すから、父が中心になって昭和四年か
ら区画整理をして受け入れることにな
りました。開発が進んですいぶん様変
りしましたが、いちばん残念なのは自
然の景色がなくなつてしまつたこと
です。代沢のまちには、陸軍の元帥や
大将などの将官の方が何人も住んで
おられました。東条さんも中将のころこ
ちらへ来られたと思います。戦後は佐
藤総理、竹下さんもお住みです。

——庭の木は保存樹林に指定されてい
ますが、門のところにシイノキ、
あれは植木職の方に聞いたところで
武者構えの育て方のものだそうで、た
いへん珍しいものといひます。皇居に
も何本もないものだそうですよ。時折
お年を召した方が庭を見たいといつて
こられることがあります。私のよう
なところも世田谷からだんだんなくな
つてきて珍しい存在になつたんでしょ
うね。



阿川家近くにある森蔵寺⑩



矢吹申彦さん。東北沢のお住まいで

下北沢のまち

——商売のまちですから、人を呼ぼう
ということはあると思いますが、
地元をしっかりとやっていないで、ただ
呼ぼうということになってしまつたら、
下北沢はなくなつてしまふと思います。
どこの大きなまちでも地元の人たちと
いうのは必ずいるわけですが、まちの
性格が外から見ても、もう誰のまちでも
ないって大きなまちがありますね。下
北沢はそんなに大きくなれるわけがな
いの、ちょっと誰のまちでもないま
ちになろうとしているところが出てき
ています。それよりも、私のまちって

みんなが思っているほうが下北沢にと
つてはずっといいことじゃないでしょ
うか。個性がなくなつてももつほどの
大きさはありませんから。

——ファッションブティックだけでは
なく、演劇もジャズもロックもありま
したから、ただのファッションのまち
にならなかつたんだと思います。ここ
がほかのまちとちよつと違つていろ
ところですね。客としても、商売しよ
うとしても、抵抗なく入つていきやす
いところがありましたから、なにかやり
たいという外からの力がうまくこのま

ちの魅力を作つていったんでしょ
う。いま若い人たちが呼ぼうとして
いるまちがいろいろありますけど、自然発
生的じゃなくて意図的な演出が多い
です。しかし初期の下北沢は自然発
生的でしたから、いいスタートが
きれたと思います。

——いまから老舗というの長い話
ですけど、そういうお店が育つて
欲しいですね。みんなうたかたの
商売をしていますけど、下北沢の
ようなまちはなかなか生まれな
いと思ひます。ぜひ育つてもら
いたいですね。

矢吹申彦さんは東北沢に住む。

子ども時代から隣町下北沢には親んできた。

長く見てきた下北沢を注文も含めて語っていただいた。

演劇もジャズもロックもありましたから、
ただのファッションのまちに
ならなかつたんだと思います。